



私の内なる博多

永井 洋子 Yoko Nagai 春日市小倉

呉服町界隈

福岡に住んで20年が過ぎた。もうそんなになるのか、とあらためて驚いている。この地で生を受けた息子も来年は成人式だ。が、私にはいまだにヨソモン意識が抜けない。山笠が来たって血が騒ぐわけじゃない。昔はこの辺りまで海だったな」と想い出に浸るような場所もない。

そんな私だが、学生時代に夢中になって読みふけた作家夢野久作の「久作展」に一個人として関わったり、ちょうど仕事の関係もあったりして「呉服町」にしがく通うようになったところから、この町に何か心安らぐある種の郷愁にも似た思いを抱くようになっていた。

呉服町界隈―そこは暮色に包まれた懐かしい町なのだ。老夫婦が営む低い軒先の小さな小さな饅頭屋。一膳めし屋の横の路地裏にはお地蔵様。線香の香りのなか、一心にお祈りす

るおばあちゃんの丸い背中。冬の日、ある店のひしやけた瓦屋根の上に並んだアルミ鍋2つ。「鍋の中の煮物がいたまないように寒い戸外に出しておく、これまことに理にかなった方法ナリ!!」あるお寺では墓地に住みついたノラ猫もいる。やさしい住職さんの計らいで御飯も名前もちゃんともらって、今ではお墓参りの人たちのアイドル(?)になっている。

呉服町界隈―この町には確かな人の生活がある。町は人とともに生きている。ここには流行のブティックもカフェエバーもないけれどこの町を歩いているだけで感じる心癒される思いは、忙しきや日常の喧嘩の中でずつとずつと忘れていた私の心の内なる原風景に他ならない。

これが博多、かな―と思う。
「良か所やんね」と思う。

ヨソモン意識はまだぬぐい去れないけれど、遠くの友達が訪ねて来たら、そんな博多を自慢してみようかな、ちよつとだけ博多っ子の顔をして。

書き手と一緒に歩いた気分になせ、人や動物への愛情に満ちた情景描写の巧みに感心。「この町には確かな人の生活がある」―町の美しさとは、こんなものだ。住む地に、しっかりと足をつけて生きている人のようだ。(記者委員 長 吉田 浩)

